式　辞

暖かな日差しの中、鳥が鳴き、梅が香り、春の訪れを感じる頃となりました。この佳き日に、令和七年度卒業証書授与式を挙行するにあたり、神宝謙一県会議員様を始め、ご来賓の皆様のご臨席を賜り、このように盛大に執り行えますことに、心から感謝申し上げます。

また、卒業生のみなさんを始め保護者の皆様と地域の方々と共に、この日を迎えられたことにお喜び申し上げます。

卒業生の皆さん、御卒業おめでとうございます。皆さんは今日、卒業式という大きな節目を迎え、九年間の義務教育を終えて、それぞれの進路に向かって巣立っていきます。

さて、今年度行われた体育会では、卒業した先輩たちや生徒たちの声をもとに、生徒会中央役員が協議を重ね、縦割りによる綱引きと応援合戦を競技に追加し体育会を盛り上げてくれました。これは、学年を超えた縦割り競技により学校を１つにまとめるための大きな力となりました。まさに、「唯一無二」、邑久中学校だけの体育会を三年生たちが中心となり作り上げてくれました。

邑輝祭では、これが、三年前一年生だった生徒たちの歌声かと思わせる進化を遂げた大合唱を聞かせてくれました。閉会式でも全校生徒に呼びかけ、肩を組んで、今年度も高らかに校歌を体育館に響き渡らせてくれました。

今年の三年生たちは、今までのことを守り継承するだけでなく、新たな邑久中学校の歴史をスタートしてくれました。

そんな3年生のみなさんに、

今日は、阪神タイガースの選手で昨年、「栄光のバックホーム」という映画になった『横田慎太郎」選手の話をしたいと思います。横田選手は小学校三年生の時から野球を始め甲子園を目指す少年でしたが、高校野球でもあと一歩というところで願いはかないませんでした。しかし、ドラフトで阪神に２位指名で入団することになり、当時の金本監督にも期待の新人と目をかけてもらっていたようです。しかし、プロ四年目、脳腫瘍が見つかり野球ができなくなってしまいます。

横田選手は闘病中、目が見えなくなり体力も衰えていきましたが、決してあきらめることなく復帰を目指してリハビリと練習に全力を尽くします。そして２軍のベンチに入るまでに回復し、ベンチでも誰よりも声を出し全力でチームを支えていたそうです。横田選手のこの力は、「選手として野球がしたい。」と言う思いだったと思います。途中くじけそうになっても、つらいリハビリや練習に耐えられたのも、自分にはやりたいこと、「目標」があったからだと思います。

横田選手は、その後再発し２回目の闘病生活をおくることになります。横田さんは、なんども病気との闘いをあきらめそうになりますが、両親の「野球はできなくても、病気と闘うことが、あなたの野球」などと数々の声かけに支えられます。さらに、お見舞いに来てくれたたくさんの阪神の指導者やチームメートたちに勇気づけられ最後まで病気と闘い続けたそうです。我々が頑張れるその陰には、見えないところで支えてくれる人たちが必ずいます。そんな人に感謝する気持ちが自分を応援してくれるたくさんの人を増やしていきます。

２度目の闘病中、横田選手は、「病気で苦しむ人の力になりたい。支えてくれた人々に恩返ししたい。」と講演活動をはじめ、歩けなくなるまで、全国を回りました。どんな境遇でも最後までやり通す、そして、自分を応援してくれたたくさんの人々に感謝を返す。その気持ちが横田選手を動かし続けたのだと思います。

横田選手引退試合の時、センターからキャッチャーに投げたストライクボールは、「奇跡」ではなく、「必然」。なるべくしてなった１球だと思いました。

邑久中学校を巣立っていく三年生のみなさん、みなさんはこれからの生活の中で、横田選手のように、結果を求めるだけではなく、その過程を大切にできる人になってほしいと思います。そのために「目標を持ち何事に対しても粘り強く挑戦し、周りの人たちに感謝する心を持った人。」

そんな人であってほしいと思います。そして、自分たちの未来を偶然ではなく必然に変えてほしいと思います。

終わりになりましたが、御列席頂きました保護者の皆様方、三年間にわたり皆様にとってかけがえのない大切なお子様をお預かりし、生徒一人ひとりに全教職員で一丸となって指導に取り組んでまいりました。この三年間、本校の教育活動に格別の御理解と御協力をいただきましたことを、教職員共々、心よりお礼申し上げます。

御来賓の皆様、地域の皆様も含めまして、改めて本校にお寄せ頂きました数々の御支援と御協力に感謝するとともに、卒業生の限りない前途を祝福して、式辞といたします。

令和八年三月十三日

瀬戸内市立邑久中学校長　松田典久